

‘大津4号’の高品質栽培を可能にする「後期摘果下垂着果法」

足柄地区事務所

神奈川県内で栽培されている温州ミカンの主要品種である‘大津4号’は、糖度が高く、食味が良いものの、大果になり易く、表年（成り年）と裏年（不成り年）を交互に繰り返す隔年結果性が強いという問題があります。

そこで、足柄地区事務所では、平成17年から、普通温州ミカンなどで果実品質向上効果が確認されている後期摘果下垂着果法の‘大津4号’への適用に取り組みました。この栽培法は、収穫後に混んでいる部分や枯れ枝、すそ枝を軽く切る程度の剪定と6月に強い新梢の芽かきを行い、摘果を従来よりも遅らせて10月に大玉果及び小玉果を摘果することで、樹体に着果負担をかけた上で下向きの果実を多く残し、下垂ぎみに着果させる方法です。

その結果、この栽培法は、現地で普及している隔年交互結実法と比べ、糖度が0.9%高くなり、LM級果実割合が12%増え、商品性の高いLM級果実を効率的に生産できることが分かりました。



後期摘果下垂着果法の摘果後の状況(10月上旬)

夏作での緑肥導入による硝酸性窒素溶脱軽減効果

三浦半島地区事務所・農業環境研究部

三浦半島では、冬にダイコン、キャベツ、夏にはスイカやカボチャ、メロンなどが作られ、特産野菜として定着しています。ところが近年、市場価格の低迷等により夏作を作付けしない空き畑が増えてきました。空き畑にしておくことで、表土が失われたり土の中の肥料分が地下水へ流出しやすくなります。そこで、本研究では、夏作に緑肥作物（エンバク）を栽培して土壌中の窒素を吸収させ、これを栽培後に鋤込むことで、後作のダイコンに利用させることを目的に試験を行っています。

研究圃場には緑肥区と非作付区（空き畑）を設け（図1）、それぞれにおける硝酸性窒素および可給態窒素の動きを調べました。空き畑では、前作由来の有機物等が無機化して硝酸性窒素が増えます。一方、緑肥区ではエンバクに吸収されるために減りますが、鋤込み後に硝酸性窒素および可給態窒素が増えてきます。エンバクの窒素吸収量は約21kg/10aと分析されましたが、全量が後作のダイコンに利用されるわけではなく、利用されない窒素は土壌中に残り地下水へ流出した可能性もあります。窒素収支についてはまだ不明な点があるため、今後も研究を継続して緑肥の効果を明らかにしていきます。



図1 研究圃場外観(左:空き畑、右:緑肥区)